

生きもの 博物誌

【サバクバッタ】
ブルキナファソ



サバクバッタの異常発生

石本 雄大
(いしもと ゆうだい)

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

決定的な被害を与えたためだろう。

食われたもんはしよがねえ

村の住民は農耕・家畜飼養および採集をおこない、収穫にも出かける。サバクバッタ到来の初日には、人びとはイネ科雑草の種子の採集をおこなっていた。バッタが飛来しはじめる子どもたちはひどくはしゃぎ、サンダルで叩こうと、大声をあげて追い掛け回した。しかし大人は男女とも、畑への大群の降下をちらと眺めた後は、採集作業に黙々と打ち込んでいた。

では作業後に、人びとがサバクバッタの駆除や情報収集に奔走したかというところではない。男性は正午過ぎから午後三時ごろまで作業をし、その後は日ごとと同様に、作物の状態の確認に自らの畑を訪れ、すぐに帰宅した。また、女性は夕暮れ前後に作業を終え、家に直帰し、晩飯を用意した。そしてその日以降も、サバクバッタが飛来した際に対処することは特にせず、採集を続けていた。

およそ一カ月半後、採集作業やそれに続く農作物の収穫も終了したところ、人に会うたびにサバクバッタによる被害について尋ねてみた。ある男性は「たった三日分しか主食作物が収穫できなかった。まあ、食われたもんはしよがねえ」と言っていた。被害の程度は畑によって幾分異なっていたが、残念そうではあるが吹っ切れたこの態度は多くの人に共通しているように思われた。

淡々と受けいれる姿勢

ヤギ・ヒツジなどの小家畜数頭が行方不明になった

不意に目の前を横切った赤い色につられて顔を上げると、バッタが群れをなして北の空を飛ぶ光景が目にと飛び込んできた。赤黒いバッタは次々と畑に飛来し、トウジンビエの穂や葉に群がった。体長五センチメートルほどのバッタが鈴なりにぶら下がり、わたしは赤い畑にきたのではないかという感覚にとらわれた。およそ一時間後、群れはようやく南へと去った。四方から聞こえていた羽音がなくなると、村は驚くほどの静けさに包まれた。空を見上げると、羽に乱反射した光と赤い点が地平線まで無数に続いていた。そして耕地には、随所に食い荒らされた穂と葉脈が剥き出しになった葉が残っていた。

サバクバッタは、北西部アフリカからサヘル地域におよぶ広範囲で異常発生した。この大発生による、村の農作物への被害はどの程度であったのだろうか。二〇〇二〜二〇〇五年の主食作物トウジンビエの収穫量を六つの畑について比較したところ、二〇〇四年の収穫量は大幅に減少した。この年は降水量が平年の二分の一以下と旱魃年でもあったため、減収がどこまでサバクバッタによるものか推計することはできなかった。しかし、二〇〇五年と比べるとやや貧弱ながらも、サバクバッタが襲来した直前には、トウジンビエは穂を出して種子をつけはじめていたことが確認されている。それにもかかわらず、収穫量がここまで激減したのはやはりサバクバッタが

際には、数人の男性が方々へ搜索に出た。足跡や目撃証言を手がかりに探し回るのである。このとき彼らは血相を変えて必死になつており、サバクバッタの発生や被害に対する淡白で諦観的な態度とはまったく異なっていた。被害額はバッタによるものの方がはるかに大きかったにもかかわらず、何故こういつた態度の違

いが生まれるのであるのか。それは彼らの認識の違いから生じたのではなからうか。サバクバッタの大発生は不可避な自然災害であり、他方、家畜がはぐれたことは解決しうる問題であるということだ。サヘル地域では降雨が不安定なため、今回のようなバッタの大発生に限らず、深刻な旱魃が起

こることもある。自然災害が頻繁に起こる不安定な環境下では、現実起こったことを淡々と受けいれる姿勢こそが、生活していくうえでもっとも大切な資質であるかもしれない。

調理をする女性たち



トウジンビエ畑



サバクバッタを捕まえた子ども

トウジンビエの穂や葉に群がるサバクバッタ



サバクバッタ【サバクトビバッタ】(学名: *Schistocerca gregaria*.)

植生が枯れ始めると、それまで単生であったサバクバッタは、食事・移動をともにする集団を形成する。単生のときにはバッタの体色は薄茶色だが、群生化したものは羽・腹部が赤色(未熟な成虫)、黄色(成熟した成虫)になる。大群は日中に5~200キロメートル移動する。この群れは数百キロ平方メートルにまたがるほど大規模であり、1キロ平方メートルに2000万匹から1.5億匹のバッタが存在するという。

